四季報No.70　2008.6

鴨東通信

おうとうつうしん

てぃーたいむ

歴史の現場をつかまえる
朧谷壽

■源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第四回〉■

古典再生へ
伊井春樹

史料探訪㉝

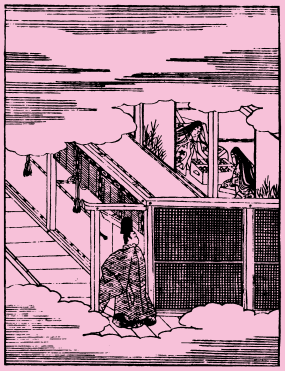
『源氏物語』千年紀
西山恵子

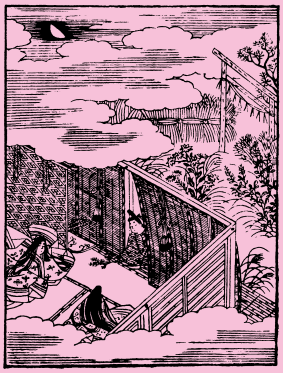
■私のノートから■

旅の醍醐味――白い布と黒いカビ――
黒岩康博

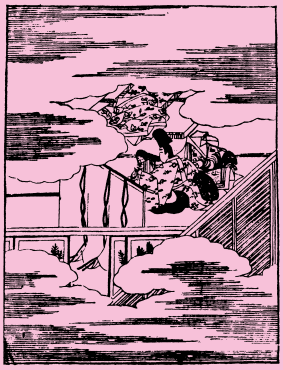
特別寄稿

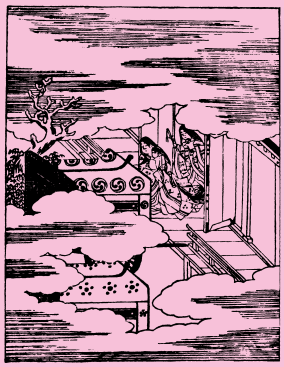
論集『公家と武家』全五巻の完結を迎えて
笠谷和比古





夏





◉新刊案内◉

一千年目の源氏物語
近代京都研究
経筒が語る中世の世界
大地へのまなざし
竹の経済史

思文閣出版

歴史の現場をつかまえる

朧谷　壽（同志社女子大学特任教授）

角田文衛先生の想い出

角田文衛先生が、５月14日に95歳でお亡くなりになりました。先生はご存じのように、私財を投じて昭和26年に古代学協会を立ち上げ、42年に平安博物館を設立しました。歴史の現場を非常に大事にされた先生でした。例えば、今の上京区の廬山寺のあたりが紫式部邸宅跡であるということを考証されて、廬山寺の庭に碑を建てられました。「そこで紫式部が『源氏物語』を書いたという根拠がうすい」というような反論もありますが、顕彰することに大きな意味があると思います。東山区の泉涌寺境内の清少納言の碑や、北区紫野の賀茂斎院跡の碑も建てられ、顕彰しようということに、ものすごい意気込みを持たれてました。とうぜん『源氏物語』一千年ということも、前から強く主張しておられました。せめて今年が終わるまではお元気でいてほしかったと思いますが、これだけの盛り上がりを見届けて亡くなったのは、ある意味で幸せかもしれません。

私は、大学を出てすぐに古代学協会で角田先生に鍛えられてきました。先生の学問は、ひとことで言うと実証主義です。昭和37・8年というのは、高度経済成長期にあたり、水道その他の工事が非常に多く、工事に先がけて発掘調査をしますので、毎日のように調査に立ち会いました。夜中の発掘もありました。そういう歴史の現場に立つというのが先生の真骨頂です。京都に生きた紫式部や清少納言などといった人たちが、どこで、どういうことをしたのだろうということを仮想し、実証する。そんな学者は今までほとんどいません。文献なら文献、考古は考古と分かれていたようです。角田先生は、それをあわせて古代学という学問を体系化したわけです。古文書や平安朝の古地図など積極的に蒐集されました。現場とか物を重視された。私たちにも「いい物があったら買ってきなさい」と言われるが、当時は見てすぐわかるものではないし、とても買えませんでした……。（笑）

平安朝についてきちっとした研究をまとめないといけないということで、大変な時間と労力をかけて『平安京提要』『平安時代史事典』（いずれも1994年、角川書店）を古代学協会で編集しました。この二つは平安朝研究の基本的文献になっていくと思います。角田先生がトップだったから、あれだけ大変な仕事ができたようなものです。そのほか上田正昭先生との共同監修で、世界の初期王権を比較研究した『古代王権の誕生』（全４巻、2003年、角川書店）。とにかくスケールが大きい学者でした。

京都の新名所

歴史の現場を顕彰する事業は、私もひきついで進めています。紫式部が仕えた藤原道長の邸宅、土御門殿というのは、今の京都御苑の迎賓館の南側に位置していました。私はかねがね土御門殿跡に記念碑がほしかったのですが、なかなか叶いませんでした。そんな折、昨年夏に京都御苑管理事務所の所長さんが大学に訪ねて来られ、「源氏物語千年紀」に何か協力したい、どんな協力ができますか、と訊かれたので、ぜひ土御門殿の碑を建ててほしいと頼みました。『源氏物語』は道長の存在なくして生まれなかったのだし、土御門殿というのは、1008年（寛弘５）に道長の娘の彰子が一条天皇の皇子（後一条天皇）を生んだところなのです。『紫式部日記』の書き出しも秋色漂う土御門殿の描写で始まります。今

年の春に「駒札ができました」と所長さんから連絡がありました。京都御苑の東端、梨木神社の南の清和院御門から入って右側に建っていました。そのほかに枇杷殿という道長のもう一つの邸宅の駒札も御苑内に建てる由です。枇杷殿（びわどの）は、彰子の妹の妍子（けんし）を中宮にした三条天皇が御所として用いています。この二つは新しい名所になります。

いっぽう京都市もこの春に、市内の『源氏物語』ゆかりの場所に40箇所余りの碑や説明板を設置しました。『源氏物語』の世界をしのびながら京都の散策ができるようになっています。

光源氏のモデル

『源氏物語』はフィクションですが、そこには千年以上前の現実の京都の姿がよく描かれています。例えば、光源氏が大成した後、嵯峨の御堂といって、詣り堂みたいなお堂を嵯峨に建てます。そのお堂は大覚寺の南、とあります。大覚寺というのは嵯峨天皇の離宮の跡です。この西南には、嵯峨天皇の息子で源融（みなもとのとおる）という人が、棲霞観（せいかかん）という別荘をもっていました。これが融の死後に棲霞寺となり、後に清涼寺になります。嵯峨の御堂という光源氏ゆかりの場所は、源融の棲霞観が意識されていると思われます。光源氏自身、源融と同様に賜姓（しせい）皇族といって、天皇の皇子でありながら源氏という姓を賜って臣下となってます。桐壺更衣（きりつぼのこうい）が生んだ光源氏は、帝の子でありながら天皇になれない。お母さんの地位が低いからです。そこで源姓を得て皇族から離れます。つまり賜姓源氏です。いっぽう桐壺更衣をいじめて死に追いやった弘徽殿女御（こきでんのにょうご）は、高い地位の后です。したがって彼女が産んだ皇子は朱雀院という天皇になっています。「いづれの御時にか」で始まる『源氏物語』に描かれている身分制のことなどは、現実の社会を反映していると思います。

『源氏物語』に描かれた時代について、醍醐天皇時代のイメージが強いと言われています。それは否定しませんが、場所や邸宅でみていくと、光源氏のモデルは嵯峨天皇の息子の源融が有力と思います。融は五条の鴨川の見えるところにも、四町四方の河原院という大邸宅を構えます。これは間違いなく、光源氏が造営した雄壮な六条院のモデルになっていると思います。

また、薫や匂宮（におうのみや）が宇治で過ごす宇治院のモデルは、道長の別荘の宇治殿だと思います。後に藤原頼通が平等院とする邸です。紫式部は中宮彰子について、何度となく道長の別荘がある宇治に行き、おそらくそこで宇治十帖の構想をあたためたと思います。その道長の宇治殿というのも、元をただせば源融の別荘地でした。源融は紫式部より一世紀余り前の人物ですが、『源氏物語』に出てくる大邸宅のモデルはみな源融に関わってくるのです。

もの言わぬ史料を読む

「夕顔」の場面を見ると、庶民の様子が描き込まれています。光源氏が五条に住む乳母の病気見舞いに行く途中、隣家の夕顔の花に見とれ、やがてその女（夕顔）の家で一夜を過ごします。その翌朝、目を覚ました光源氏は、周囲の家の人の「今年は寒く収穫も思わしくない」といったような会話を耳にし、石臼を引く音や砧（きぬた）を打つ音を聞いている。高級住宅街に住む光源氏にとっては異次元の世界だったでしょうね。紫式部は、五条という所は庶民的雰囲気のある場所と認識していたと思います。歩くことはなかったでしょうが、物見高い人ですから、牛車（ぎっしゃ）で通るときなど御簾越しに、そっと覗き見ていたにちがいありません。

文献史料には、夕顔が住んだという五条辺りのことはなかなか出てきません。何しろ記録の書き手は貴族ゆえ、彼らの世界のことは記録されますが、庶民の暮らしまでは手が届かないので解らないことが多いです。当時の貴族は約千人ほど、平安京には十数万の人が暮らしていたと言われてます。ということは貴族は１％にも満たない。人口の大半を占める庶民の動静が解らないのはもどかしいことです。絵巻や説話集や発掘資料が拠りどころとなるのです。

文献資料を補って余りあるのが発掘資料です。平安京の発掘は、故杉山信三先生が大きく進められました。私が古代学協会で工事現場の立ち会いをしていた際に、毎日のように杉山先生は現場を見て回られ、ときには穴の中に入って調査されている姿が思い出されます。杉山先生がおられなかったら、平安京研究はこれほどの成果を挙げていなかったかもしれません。先生が初代所長を務められた（財）京都市埋蔵文化財研究所の京都市考古資料館（上京区今出川大宮東入）では、「紫式部の生きた京都展」を来年１月31日までやっています。地中から発見された遺物が展示されていますが、当時の暮らし向きなどを知るのには大変よい企画と思います。一人でも多くの方に見ていただきたいですね。

（2008.5.28　於：思文閣出版）

シリーズ古典再生①

一千年目の源氏物語

伊井 春樹 編

たんなる古典復興ではなく、それらの作品を現代の眼でもう一度見直して再生することを目指して開催された国文学研究資料館主催シンポジウム「一千年目の源氏物語」、思文閣出版・京都新聞社主催シンポジウム「私の源氏物語」をもとにし、斯界の識者による「源氏物語論」を集約。

内容

第１部　現代に生きる『源氏物語』の世界

近江の君について　**大岡　信**
「いろごのみ」の女神と光源氏　**岡野弘彦**
昭和が発見したもの　**丸谷才一**
私にとっての『源氏物語』　**加賀美幸子**
シンポジウム「一千年目の源氏物語」
（大岡信・岡野弘彦・丸谷才一・加賀美幸子
司会：伊井春樹）

第２部　私の『源氏物語』

『源氏物語』の宗教性　**山折哲雄**
『源氏物語』と京ことば　**中井和子**
『源氏物語』と寝殿造　**川本重雄**
『源氏物語』をめぐる人々　**伊井春樹**
シンポジウム「私の源氏物語」
（山折哲雄・中井和子・川本重雄　司会：伊井春樹）

本文より

「『源氏物語』を学者でもないのに原文で読めるのは、我々日本の文学好きだけが許されているすごい特権で、これを使わない手はない」　（丸谷才一氏）

「光源氏の愛、その内面生活というのは、最終的には男であることをやめることを通して即身成仏の世界へみちびこうとしている空海の考え方に似通っている」　（山折哲雄氏）

最新刊

▶四六判・250頁
定価1,680円
ISBN978-4-7842-1408-2

シリーズ古典再生　続刊

②日本の心と源氏物語

岡野弘彦編
今夏刊行予定　予価1,800円
歌人であり、宮内庁御用掛を務める編者が、記紀や万葉集などの広い視点から、源氏物語に表れた日本の心を読み解く

③歴史の中の源氏物語

山中裕編
今秋刊行予定　予価1,800円
王朝文化・有職故実研究の第一人者が、年中行事の観点から源氏物語の歴史的世界を読み解く

千年前の源氏物語の世界を歩くための探訪ガイド

京都源氏物語地図

社団法人紫式部顕彰会 編纂／角田文衛 監修／加納重文 編集責任　大好評

現在の地図に平安京復元条坊を重ね、源氏物語ゆかりの邸宅などを配置。
散策に最適なハンディタイプの地図１枚に、案内をかねた小冊子つき。

定価840円（送料：3冊まで150円、4冊以上は通常の小社規定によります）
ISBN978-4-7842-1372-6
▶地図：A2判（594㎜×420㎜）1枚（表・平安京内地図　裏・京外地図）　解説・アクセスガイド冊子：105㎜×297㎜／32頁

海外でも、日本文学の古典となると、マンガへの関心から出発する学生が多いため、授業でも積極的にテキストとして利用していると聞く。ほかの古典作品でも、一部はそのような文化現象が存在するとはいえ、『源氏物語』は異常なまでの生産量である。それは正しい日本文学なり古典の理解ではないと、目くじらを立てて反対する向きもあるであろう。ただ、菅原孝標女以降、純粋に作品だけに対峙し、その世界を味読した読者がどれほどいたのであろうか。大勢は注釈書なりダイジェスト版を利用して古典の世界に入っていくわけで、マンガだからだめであるとは言えない。それがきっかけとなり、古典文学を本格的に学び、さらには研究の世界へ進む者がいれば、それはそれで影響があったということになる。それが正しく導くかどうかは、精通した人々の役割であり、いきなり古典本文から始める者がいれば、それはまた大いに評価すべきことでもあろう。

日本だけではなく世界的な傾向だが、人文学はきわめて厳しい研究環境の状況に置かれている。競争原理と成果主義が浸透し、効率化という題目のもとに自然科学の分野でも目に見える結果を追い求めるため、ややもすると地道な基礎研究はおろそかになりかねないと研究者や有識者は危惧もする。社会の動向を反映して大学経営も学生の獲得に走り、迎合する学部や研究科を新設し、実学的な分野を優先しかねない。国文学に限っても、各地に有能な研究者が存在するとはいえ、学科の変更、統合、それにともなう人員の縮小などで研究する環境は劣化し、非常勤講師の雇用も思うにまかせないため、かつてのように上代から近代文学にいたる科目の提供は現実的でなくなってしまった。そこで学んだ学生が、高校などの教師となり、古典文学を教えようとしても十分な知識がなく、指導書に頼っての授業になってしまう。教える者が興味のないままクラスを担当しても、感動を伝えることはできない。そこからますます古典離れ、日本文学への無関心層を増やす結果となり、悪循環はとめどもなく、文学全体が疲弊し、一部の趣味人の玩弄物になりかねない。

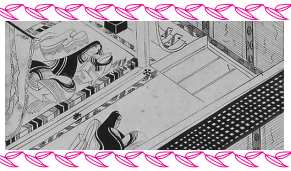
個人の嗜好は自然のなりゆきにまかせるしかないとはいえ、研究の分野は意図して創出や支援をしていかなければ、物質的な豊かさを享楽的に求める傾向だけが強調され、文学研究など衰退しかねない。私としては、演劇でもマンガであっても、ポップカルチャーと称される分野を利用してでも、文学に関係するものであれば、大いに奨励してもよいと思う。そこから日本の古典への関心が生まれ、一部でも本格的に進む者が出てくれば、これまでとは異なる新しい研究への道筋が派生するかも知れない。

そのためにも、日本文学は全国的なネットワークを結び、さまざまな分野や方法によって今後は連携していくのが一つの解決策であろうと思っている。いわば人的資源の共有化であり、研究資料の相互利用といった方途である。さらに、日本文学という名称のもとに、国内の研究者を対象とするだけではなく、海外の多くの研究者とも協力し合い、交流を深めるべきであろう。たまたま『源氏物語』が流布するようになって一千年という節目を迎え、この作品だけが脚光を浴びているが、それを一過性の祭にしてはならないと思う。古典文学への関心を梃子にし、国内外の研究者が日本文学研究の将来を真剣に考え、模索する年になればと私は願っている。江戸時代の活発な出版文化と多様な仕掛けを、現代こそ継承すべきであろう。

（伊井春樹先生ご執筆分は今回で完）

源氏物語千年紀・古典再生に向けて〈第四回〉

古典再生へ



伊井春樹
（国文学研究資料館館長）

伊井春樹（いい　はるき）
国文学研究資料館館長．大阪大学名誉教授．著書『源氏物語注釈史の研究』『成尋阿闍梨母集全釈、私家集全釈叢書17』『源氏物語注釈書・享受史事典』『物語の展開と和歌資料』『ゴードン・スミスが見た明治の日本』など．

史料探訪 33

『源氏物語』千年紀

宇治市源氏物語ミュージアム
西山恵子

今年は『源氏物語』が世に知られるようになって千年紀を迎えるということで、私どもの館でも、いつもにましての賑わいをていしている。『紫式部日記』に藤原道長を支えた大納言の一人の藤原公任（きんとう）が「このへんに、若紫さんはいらっしゃるかな」と冗談をいったのが千年紀のはじまりである。その冗談をいったのが、寛弘五年、1008年にあたるからである。もちろん、その年には一部分が書かれていたのであって、寛弘五年から書かれたということではない。

でも少し待ってほしい。『源氏物語』がブームであったのは、今年と数年前の世紀が変わるミレニアムの時だけだろうか。徳川家康は京都から講師を招いて『源氏物語』を読んでいたというし、また、源頼朝も読んでいたとされている。武家の頭領と呼ばれる人物が『源氏物語』を読んでいたことになる。それはなぜであろうか。武家の人々にとっては京都・貴族文化を知るテキストであったろうし、貴族にとっては自分たちのもっとも華麗な時代を想いださせてくれるものであったに違いない。

いまも、ある年齢の人々に、『源氏物語』の作者はと聞くと、たいていのかたは紫式部とお答えになるであろう。しかし、『源氏物語』を全部よんだ人はとなると、これは疑問であろう。それなのに、『源氏物語』という響きになつかしさは残りはしないだろうか。それは、日本文化の源流を感じるからではないだろうか。『源氏物語』が書かれたころは、女性が使っていた「かな」の文字が流行し、また、年中行事なども少し前のように唐風ではなく日本ナイズされたかたちで作られはじめている。まさに、『源氏物語』の時代は日本文化の源流がそこにあるのである。

そして、源氏物語が絵画化されたのも実に古く、平安時代末期から鎌倉時代までさかのぼるし、それらが一つの形としてつくられたのは室町時代後半の土佐派、狩野派の時代となろう。

当館にも伝土佐光則（みつのり）（1583～1638）作とされる『源氏絵鑑帖』がある。この絵鑑帖は五十四巻が全巻そろっていて、且つ保存状況も大変よい。筆者に擬せられる土佐光則の繊細な画風をよく伝えているところが非常に貴重である。光則は、画帖や屏風にその名を残す、土佐光吉の子息といわれ、父光吉が堺で死去したあとは、京都にでて土佐派再興をはかった絵師である。

作品は絵の本体は縦17cm、横15cmのこぶりのものであり、一巻の桐壺（きりつぼ）から二十七巻の篝火（かがりび）までと、二十八巻の野分（のわき）から五十四巻の夢浮橋（ゆめのうきはし）までが上下に別れていて、詞書は残されていない。そして表紙に「伝土佐光則」と題箋が貼られている。この題箋の筆者は土佐光則という確証はなかったのであろう。でも、土佐派、光則の筆致を嗣ぐ誰かという確証はあったのであろう。

この中でも逸品は四十五巻の橋姫（はしひめ）のくだりである。二人の女性を垣間みる光源氏の次男の薫。また薫に合奏をのぞきみられているのをしらない姉妹の大君（おおいぎみ）と中君（なかのきみ）。そこには、妹の琵

橋姫（当館蔵『源氏絵鑑帖』より）

琵の撥がまねきよせた明るい月、これからはじまる宇治十帖のかなしい恋を暗示しているかのようである。このように、当館の画帖はつづくわけである。これに合わせて、当館も月光のしたでの垣間見の模型が作ってあるのである。

『源氏物語』のブームといわれながら、本文を読んだ人が日本人の中で何人いるのだろうか。

―MEMO―

宇治市源氏物語ミュージアム

〒611-0021 京都府宇治市宇治東内45-26
TEL 0774-39-9300　FAX 0774-39-9301
URL http://www.uji-genji.jp/

宇治市では、「紫式部文学賞」の制定をはじめとして「源氏物語をテーマとしたまちづくり」を積極的に進めており、平成10年11月８日、宇治上神社近くに開館した「源氏物語ミュージアム」は、それらの事業の集大成をなすものです。宇治市が持つ歴史と文化の香りを大切にしながら、復元模型や映像を駆使して、わかりやすく親しみやすいミュージアムをめざしております。
そして、長年親しんでいただいた映像も、９月３日よりリニューアルさせていただき、『橋姫』（白石加代子主演）にかわります。
館内に入ると、そこは千年の時空を超えて、『源氏物語』の世界へ。
常設展示室・企画展示室の他、源氏物語を知っていただくための図書室・コンピューターコーナーや、宇治特産のお茶を使ったスイーツを味わっていただける喫茶コーナー、源氏物語グッズを取り揃えたショップコーナーもございます。
なお、当館は７月28日～９月２日までリニューアル・オープンのため、休館にさせていただきます（一般公開は９月３日の午後より）。

- 開館時間：午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）
- 休 館 日：月曜日（祝日の場合はその翌日）・12月28日から１月３日
- アクセス：京阪　宇治駅から徒歩10分
  ＪＲ　奈良線宇治駅から徒歩15分

丸山 宏・伊從 勉・高木博志 編

近代京都研究

【最新刊】

歴史都市・京都は、近代に大きく変わったまちであった――。本書は、京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れながら、近代史を中心に分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した京都大学人文科学研究所・共同研究「近代京都研究」の成果である。

《内容目次》

はじめに　（丸山　宏）

Ⅰ　都　　市

都市改造の自治喪失の起源　（伊從　勉）
都市計画事業として実施された土地区画整理をめぐって　（中川　理）
地価分布からみた近代京都の地域構造　（山田　誠）
丹後加悦の縮緬産業と近代の町並み　（日向　進）

Ⅱ　風　　景

近代京都と桜の名所　（高木　博志）
近代における京都の史蹟名勝保存　（丸山　宏）
昔の「東京」という京都イメージ　（藤原　学）
御大典記念事業にみる観光振興主体の変遷　（工藤　泰子）
近代絵馬群へのまなざし　（長　志珠絵）

Ⅲ　文　　化

凋落と復興　（小野　芳朗）
京都の初期博覧会における「古美術」　（並木　誠士）
近代の茶の湯復興における茶室の安土桃山イメージ　（桐浴　邦夫）

Ⅳ　政　　治

北垣府政期の東本願寺　（谷川　穣）
京都府会と都市名望家　（原田　敬一）
旧彦根藩士西村捨三における〈京都の祝祭〉、そして彦根　（鈴木　栄樹）

Ⅴ　学　　知

阿形精一と『平安通志』　（小林　丈広）
京都帝国大学法科大学草創期における総長及び図書館長批判の顚末　（廣庭　基介）
田中緑紅の土俗学　（黒岩　康博）
京大生と「学徒出陣」　（西山　伸）
京大国史の「民俗学」時代　（菊地　暁）
おわりに　（伊從　勉／高木　博志）

▶A5判・608頁／定価9,450円

ISBN978-4-7842-1413-6

みやこの近代

丸山 宏・伊從 勉・高木博志 編

「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの85篇。２年にわたり『京都新聞』に平易な文体で連載されたものを再構成しまとめたもの。

図版多数収録

《内容》まちのインフラ／まちのイメージと環境／まちの建築／美術と工芸／なりわいと政治／まつりと世相／京都帝国大学／みやこの海外

▶A5判・268頁／定価2,730円

ISBN978-4-7842-1378-8

関西モダニズム再考

竹村民郎・鈴木貞美 編

関西都市文化圏の経済的・社会的・文化的先進性や、地域に根ざした自立的なモダニティの上に花開いた関西モダニズムの諸相をとりあげた14篇。

《内容目次》

Ⅰ「阪神間モダニズム」の社会的基調／琵琶湖疎水のモダニティ／平生釟三郎日記に見る関西のモダニズム／前川國男と日本近代建築／大衆女性雑誌における競合的消費主義

Ⅱ 歌人前川佐美雄の場合／梶井基次郎「檸檬」に見る大正末・モダン京都／大阪におけるカフェ文化と文藝運動／関西「マヴォ」について／築地小劇場と関西新劇運動／関西モダニズムと西洋体験　画家たちとその周辺／橋本関雪とアジア／阪神間モダニズムにおける大衆文化の位相

Ⅱ モダニズムと伝統、もしくは「近代の超克」とは何か

▶A5判・口絵12頁、本文604頁／定価8,925円

ISBN978-4-7842-1379-5

近代茶道（ちゃどう）の歴史社会学

田中秀隆 著

大日本茶道学会副会長であり、社会学者でもある著者が、近代茶道文化論を具体的に分析・探究。「伝統文化とは近代に自己変革に成功した文化である」との近代茶道史テーゼにもとづき、近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▶A5判・454頁／定価6,825円　ISBN978-4-7842-1377-1

昭和初期一移民の手紙による生活史

ブラジルのヨッチャン

中野 卓・中野 進 共編

昭和３年（1928）１月にブラジルへ移民として出国した中野義夫が日本へ送った書簡を中心に編纂。異国での苦難の日々、母国への想い、経済的無心、家族や兄弟姉妹のこと――海を越えて届けられた一通一通の手紙に移民の生きた声が反映されており、昭和という時代の一側面をとらえた貴重な資料ともなっている。

▶A5判・294頁／定価2,940円　ISBN978-4-7842-1301-5

明治維新史という冒険

青山忠正著　　**佛教大学鷹陵文化叢書18**

読売新聞５月４日読書面で紹介！

評者：御厨貴（東京大学先端科学技術研究センター教授）

明治維新史から「不純物」を取り去り、新たな解釈を施す冒険の喜びを知るための道標を提示した本。Ⅰ章の維新史紀行は、京都・大阪そして関西近郊の維新の足跡を訪ねて、なかなかの風情がある。桂小五郎像や木戸孝允旧跡、岩倉公幽棲旧宅、越前藩邸門、薩摩藩蔵屋敷跡、埋木舎（うもれぎのや）、天誅組本陣跡などなど。評者もまたもう一度著者に引かれて史跡参りといきたいものだ。

軍事を扱ったⅡ章では、賞罰厳しい奇兵隊の内実に触れた小文が印象に残る。人にスポットをあてたⅢ章は、何といっても坂本龍馬だ。龍馬暗殺に至る解明不能の実態を説いて、著者は明治維新史が有する闇の深さとそれ故の魅力を伝えたいのだ。政局を論ずるⅣ章は、維新史を時系列的にかつ問題史的に取り上げている。著者の文章は手堅いが読みやすい。写真の適切な使用と相俟って、維新史に親しむ恰好の入門書となっている。

（この文章は、執筆者・読売新聞社の許諾を得て転載しています）

▶四六判・332頁／定価2,520円　ISBN978-4-7842-1394-8

増補 郷土教育運動の研究

伊藤純郎著

長らく品切れだった旧版に１章を加えて再版。1930年代に展開された郷土教育運動の歴史的意義を、柳田国男の郷土研究論と関連させながら、文部省や郷土教育連盟、地域社会の反応を通じて、実証的に解明する。

▶A5判・504頁／定価10,290円　ISBN978-4-7842-1402-0

三高の見果てぬ夢　【最新刊】

厳平著　　**中等・高等教育成立過程と折田彦市**

明治前期（1880～1890年代）における中等・高等教育の成立過程を、長く三高校長職にあった折田彦市に着目し、第三高等中学校およびその前身校の変遷に即して明らかにする。

▶A5判・350頁／定価7,875円　ISBN978-4-7842-1399-3

明治維新期の政治文化

佐々木克編

政治史、文化史、思想史、精神史を融合した“政治文化”という視点から、明治維新期の諸問題にアプローチを試みた11篇。京都大学人文科学研究所の共同研究の成果。

▶A5判・390頁／定価5,670円　ISBN4-7842-1262-0

日中戦争から世界戦争へ

永井和著

【内容】東アジア20世紀史の中の日本／日本陸軍の華北占領地統治計画について／日中戦争と日英対立／1939年の排英運動／日中戦争と帝国議会／日中戦争と陸軍慰安所の創設

▶A5判・516頁／定価7,980円　ISBN978-4-7842-1334-4

明治前期の教育・教化・仏教

谷川穣著

明治前期を中心に、従来の日本近代史、仏教史、宗教史、教育史といった諸分野がとりこぼしてきた問題の重層性・複雑性を、教化・宗教（仏教）との関係から浮き彫りにする。

▶A5判・372頁／定価6,090円　ISBN978-4-7842-1386-3

森有礼における国民的主体の創出

長谷川精一著

森有礼の言説や政策の目的が、日本国民の主体の創出にあったという視点から、先行研究の大半が十分に検討してこなかった外国語の史料や文献をも利用し、さまざまな角度から検討を加えた画期的な一書。

▶A5判・466頁／定価9,450円　ISBN978-4-7842-1367-2

貴族院と立憲政治

内藤一成著

明治から大正前期にかけての貴族院を主導した院内会派・幸倶楽部、及び最大会派・研究会の動向を中心に分析。同時期の内閣・政党の動向を重ね合わせ、近代日本における立憲政治の実態、構造を探求する。

▶A5判・438頁／定価7,980円　ISBN4-7842-1278-7

日中戦争についての歴史的考察

明石岩雄著

日中戦争の全面化は、太平洋戦争への決定的転換点であり、その結果は日本の対中国政策の破綻でもあるとともに、国際資本の試みの挫折といえる。本書は、日中戦争の原因について歴史学から考察する。

▶A5判・352頁／定価5,775円　ISBN978-4-7842-1347-4

●私のノートから●

旅の醍醐味――白い布と黒いカビ――

黒岩康博

旅の愉しみの一つに、みやげ物を買う、ということがある。と言ってはみたものの、いざ旅行に出かけると、途中寄ったところで少しくらい心惹かれるものがあっても、重いだとか邪魔だとか自分の中で理由を付けて、なかなか財布を取り出すところまで行かないのが実情、結局京都駅に降り立ってみると、毎度お馴染み黄色い菓子を手にぶら下げていたりする（まあそこそこ喜ばれるからよいが）。これは誰かに渡す土産についてのことだが、自分のために何か買う場合でも私の場合は同じで、到底みうらじゅんの言う「いやげもの」（もらっても嬉しくない「いやな」＋「みやげもの」）などを、話のネタに買って帰る元気はない。

そんな無精者の私が、旅の記念として最も重宝しているのが、宿の手拭い（タオル）である。新宿四丁目の旅館のタオルまで持って帰るもんだから、家の中にはタオルが一杯。しかし、これならば箸袋なぞを持って帰って、全く男はガラクタばっかり集めるから、といった顔をされなくても済むというものだ。今夏刊行される『近代京都研究』に掲載される同研究会開催記録の校正刷をつらつら見ていたら、私の参加した舞鶴と福知山・丹後への研究旅行のこと―貯水池、舟屋、遊廓跡―がまざまざと思い出されたが、奥伊根の宿「油屋」の記念品も、タンスの中にしっかりと納まっている。

しかし、今回同書に収録される拙稿「田中緑紅（りょくこう）の土俗学―『奇習と土俗』と二つの旅行―」で取り上げた郷土研究家田中緑紅の旅行は、そんな甘いものではなかった。東北を一周しながら買い、食い、拾う緑紅一行の勢いの何と凄まじいこと。詳細は本編に譲るが、緑紅は毎晩みちのくの宿からその日の収獲物―絵馬、玩具、絵葉書など―を京都に送っている。やはり蒐集家（コレクター）はこれくらいの気概がなければいけないのだろう。同じく絵馬や玩具・納札のコレクターであった、「お札博士」フレデリック・スタールの『お札行脚』（金尾文淵堂、一九一九年。二〇〇七年、一九一七年に出版された同社の『山陽行脚』と併せて国書刊行会より刊行）所収の「東北行脚」と比較すると、スタールは珍奇なものの撮影や現地のコレクターたちとの交流に夢中ではあるが、物品の掻き集めぶりは緑紅たちに遠く及ばない。

このように、緑紅たちの東北行きには明確な目標の一つとして「モノ」の蒐集があり、彼らは諸所の物産陳列場へ出入りして盛んに地元の特産品を求めたが、緑紅もお札博士もいない研究会の私たちは、専ら現地に蓄えられた「知」に触れることを求めた。それは端的には都道府県立・市町村立の図書館・美術館・博物館（の所蔵資料）であり、当代英知の粋を集めた所謂「近代化遺産」や近代社会の遺制もそこに含まれる。ただ、私個人に関して言えば、該地の古書店を覗くことも非常に楽しく、重要な探究である。そこで私を待っているのは、刊行当時は最先端の「知」であったかも知れぬが、広く流通しなかったためか今では忘れ去られて顧みられず、埃をかぶった近代の「郷土本」である。

こうして一度断絶した「知」の体系を、再構築するのは簡単なことではない。その点、この度世に出る『近代京都研究』、そしてその姉妹版（廉価版？）であり、『京都新聞』への連載をまとめて三月に刊行された『みやこの近代』は、そんなカビ臭い思いをせずとも手に入り、近世・近代より繋がった現在の京都を読み解く視点にあふれている。これは京都を訪れる人だけでなく、京都に住まう人にとっても実に慶ぶべきことであろう。一読すれば、町屋や碁盤の目が、鴨川や平安神宮・円山公園が、種々の「みやび」な祭りや芸能・芸術が、立ちどころに今までとは異なる形で眼前するのである。この本と俵屋のタオルだけ持って帰ればよいとは、無精な人間には何と楽ちんな京都旅行であろうか。カバンには是非ともこの二つを収められるスペースを空けておきたいものである。

くろいわ・やすひろ
1974年京都市生．京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学（日本史学）．博士（文学）．現在，天理大学文学部非常勤講師など．「万葉旅行の誕生―風景写真と臨地指導―」（『國文學 解釈と教材の研究』53-6，2008年）など．

（8頁に図書案内）

大地へのまなざし 歴史地理学の散歩道

〔6月刊行〕

金田章裕著

古代日本の条里制から世界地図まで、歴史地理学のおもしろさを紹介するとともに、グローバルな研究を展開してきた著者の最新の成果をまとめる。

Ⅰ　なりわいと大地
1　道行く人びと
2　景観史への道程
　――「条里制」研究から何が見えるか――
3　町と村の発達――宇治と巨椋池周辺――
Ⅱ　はるかなる大地
4　英国の世界認識と世界覇権
　――ガリバーからゴールドラッシュへ――
5　世界の大地への関心
　――「新訂万国全図」の編集過程をめぐって――
6　北海道殖民地区画の特性と系譜
Ⅲ　禍福おりなす大地
7　古代都市の情景
8　南海道――直線道と海路・山道――
9　琵琶湖岸の変遷と土地利用
　――近江国高島郡木津荘域の条里プラン――
10　禍福おりなす大地
Ⅳ　時空を越えたまなざし
11　文化の探求――時空を越えたまなざし――

きんだ・あきひろ……1946年富山県生．京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学．博士（文学）．現在，大学共同利用機関法人・人間文化研究機構機構長，京都大学名誉教授．史学研究会理事長・人文地理学会会長．

▶A5判・316頁／定価4,725円　ISBN978-4-7842-1405-1

王権と都市　今谷明編

国際日本文化研究センターの共同研究「王権と都市に関する比較史的研究」の成果。日本、アジア・イスラーム、ヨーロッパの３領域から11篇の論文を収め、各時代・各地域での都市史のあり方を相互に比較検討し、「都市とは何か」という命題の解明に挑む。

▶A5判・372頁／定価7,140円　ISBN978-4-7842-1396-2

蓬萊山と扶桑樹　日本文化の古層の探求

岡本健一著　〔６月刊行〕

中国伝来の神仙思想のうち、不老長生の仙境「蓬萊山」のイメージと、生命更新の仙木「扶桑樹」のシンボルが、日本の古代文化におよぼした影響の諸相を、歴史考古学的に明らかにする。20年前より「前方後円墳＝蓬萊山起源」説を提唱してきた、元新聞記者でもある著者の研究の集大成。

▶A5判・388頁／定価5,775円　ISBN978-4-7842-1400-6

石山寺の信仰と歴史

〔最新刊〕

鷲尾遍隆監修・綾村宏編　オールカラー・図版150点

石山寺の信仰・歴史・美術・文学・経典を、第一線の研究者が、豊富なカラー図版とともに解説。

〔内容〕

観音信仰と巡礼の寺（頼富本宏）／創建とあゆみ（綾村宏）／仏像と絵画の荘厳（宮本忠雄）／伽藍のすがた（山岸常人）／紫式部と『源氏物語』（奥田勲）／聖教の伝承（沼本克明）

▶A5判・180頁／定価1,890円　ISBN978-4-7842-1387-0

平安期の願文と仏教的世界観

工藤美和子著　佛教大学研究叢書②

平安期に記された願文を通して「慈悲」「利他」といった仏教思想が、当時の社会や個人に果たした「公共的」な役割を明かし、新たな仏教史の視座を提示する。

９世紀の願文にみる仏教的世界観／10～11世紀の仏教的世界観（一）／10～11世紀の仏教的世界観（二）／院政期の願文にみる仏教的世界観

▶A5判・366頁／定価6,825円　ISBN978-4-7842-1393-1

別府大学文化財研究所企画シリーズ①　「ヒトとモノと環境が語る」

経筒が語る中世の世界

小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司編　〔最新刊〕

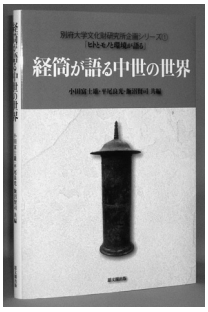
おもに九州出土の経筒をとりあげ、考古学・歴史学・美術史学に加え、分析科学などの先端機器を駆使した先駆的研究も収録。文系理系を問わず、さまざまな切り口から「経筒が語る中世の世界」をえがく。

Ⅰ　経筒が語るヒトの交流の世界

銭は銅材料となるのか（飯沼賢司）／材料が語る中世（平尾良光）／九州出土経筒の鉛同位体比が語るもの（石川ゆかり・平尾良光）／経筒の制作と地域性（原田一敏）／埋経と仏像（八尋和泉）／経塚勧進僧の行動と連鎖の軌跡（栗田勝弘）

Ⅱ　九州地域出土の経筒が語る世界

九州における経塚・経筒研究（小田富士雄）／肥後における経筒について（島津義昭）／熊本県人吉・球磨地方における経筒について（和田好史・山本研央）／肥前佐賀の経塚（田平徳栄）／大宰府における経塚経営とその背景（山村信榮）／筑後の経塚と経筒（小澤太郎）／福岡県みやこ町出土の経筒鋳型（木村達美）／福岡県みやこ町勝山松田出土の経筒（井上信隆）／大分県宇佐市妙楽寺出土経筒（佐藤良二郎）



▶B5判・236頁／定価5,040円　ISBN978-4-7842-1409-9

唐が滅んだのち、五代十国の軍閥政権乱立の時代が訪れる。日本に武士封建制度が成立したのは決して異質なことではなかったことが分かる。

むしろ中国で軍閥の長であった趙匡胤が宋朝を樹立したのち、軍閥の武力を掣肘するに、朱子学にもとづく科挙制度を徹底して科挙官僚制を定着させ、李氏朝鮮もこれにならった文人官僚制を敷いたことから、日本がむしろ異質な様相を呈したというのが事実である。

ではアラブ、トルコはどうか…。疑問と関心は果てしなく膨らんでいくこととなる。

このような前近代における社会構成のあり方は、それぞれの地域、社会が近代化するにあたって、それぞれ特有の近代化のあり方を規定するものでもあるし、引いては現代の諸社会それぞれ固有の性格を刻印することにもなるであろう。

本共同研究会の中間点にあたる二〇〇三年、三月一〇日から一週間にわたり、本テーマをめぐって、世界の専門研究者をまねいた国際シンポジウムが日文研で開催された（その成果が『国際シンポジウム　公家と武家の比較文明史』）。

これあたかも第二次イラク戦争勃発の直前にあたっており、国連を舞台に瀬戸際の議論のなされていたときであった。それを踏まえ、わが国際シンポの冒頭では以下のように会議の趣旨と意義を宣告したものである。

「当面の論争点は、大量破壊兵器の廃棄の有無というすぐれて軍事技術的な問題ではありますが、しかしながらこの問題の背景には、関係当事国それぞれが伝統的に育んできた文化的価値のギャップに由来する対立と理解障害が伏在しているように思われます。

すなわち、両者の世界観の相違。それぞれの社会における究極の価値あるいは価値の源泉とは何か。どのような価値の構造ないし体系を有しているのか。価値の序列と優先順位はどうなのか。それらの価値関係から導き出される、政治における目的・理念と責任性の問題。政治的指導者は誰に対してどのような責任を負うのか。政治における公共性と正当性はそれぞれの国家においてどのように構成され、どのような根拠を有しているのか、等々。

そのようなことに思いを致す時、現代の諸国家および諸社会の母胎をなしている前近代の諸社会のあり方と、それらの文化的価値の解明を課題とするわれわれのシンポジウムは、時宜に適った試みであると言うことができるかも知れません。」と。

われわれは非力にして、現在に至るも泥沼状態にあるイラク戦争を阻止することはできなかったが、研究の意義と志そのものは決して誤っていなかったと信ずるものである。

（国際日本文化研究センター教授）

最新刊
笠谷和比古編　**公家と武家IV**　官僚制と封建制の比較文明史的考察

●内容●

序論 前近代社会における官僚制と封建制の歴史的意義
【日本】
律令官僚制と貨幣経済／制度の〈ウチ〉と〈ソト〉／曽我物語にみる源頼朝の王権確立をめぐる象徴表現について／日本中世における文人政治と武人政治／孝養から見た鎌倉時代の家族／五山禅僧の「文官」的性格／武士領主制の展開における国郡の枠組みと国役制度の位置／諫言の近世日本思想史／武家官僚制の一視角／『川路聖謨遺書』と『東照宮御遺訓』

【東アジア】
高麗末・朝鮮初期の私兵と文・武官制の史的意義／西晋における諸王の封建と出鎮／科挙一瞥／明朝官制の品級構造／清朝末期における湖南省の湘郷の曾氏一族

【中東・西欧】
イスラームの騎士と官僚／元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容／一五世紀フィレンツェの領域支配と支配権の理念／ヨーロッパにおける主従関係と住民把握の論理／九～一二世紀フランスにおける王権、権門、助言による統治／エドワード一世期司法官僚ロウジャ・オヴ・レスタの経歴と国王の立法活動

▶A5判・544頁／定価8,925円

ISBN978-4-7842-1389-4

論集『公家と武家』全五巻の完結を迎えて

笠谷和比古

本年五月、一二年余にわたって開催されてきた国際日本文化研究センター（日文研）における共同研究会「公家と武家」の成果報告論集の最終巻『公家と武家Ⅳ―官僚制と封建制の比較文明史的考察―』が刊行された。

本共同研究会は一九九三年から始められた。当時は村井康彦先生が代表で、わたしがその幹事を勤めることとなった。二人でさて何を共同研究会のテーマにしようかという相談になって、村井先生は公家研究の専門家で、私は武士研究が専攻だから、「公家と武家」でいきますかという軽い考えではじめたのが偽らぬところであった。だが、共同研究会を進めていくうちに、これが意外な広がりと深みを孕むものであることを知って驚かされることになる。

日本史の枠組みの中でやっている分には、通り一遍の公武関係論に終始していたかも知れないのだが、日文研は国際と学際がうたい文句なので、海外諸国の文人的なものと、武人的なものとを導入しつつ比較研究を行おうということになった。そこで韓国・中国・アラブ・トルコ・ビザンチン・ギリシア・イタリア・ドイツ・フランス・イギリス等々の諸文明地域を専門とする研究者もメンバーとして研究会に参加してもらったことから、このすぐれて日本的なテーマは、大きな探究可能性を孕んだグローバルテーマへと発展していくこととなった。

まず、そもそも公家という存在が問題となる。日本史ではおなじみのこの特有の支配階層は、外国へもっていったとき、いったい諸地域においてそれぞれどの階層に比定されるのだろうか。相当階層は存在しないのだろうか。

日本と同じく封建制度を発達させた西ヨーロッパと比較したとき、日本の武士に相当する騎士は広く見られる。しかし公家に相当する階層は見当たらない。ヨーロッパでは皇帝、国王からはじめて廷臣たちも、その大半が騎士化していくからであり、天皇と廷臣たちとは別に武士階級が勃興してきた日本との事情の相違に由来している訳である。そこで、日本では天皇や公家と呼ばれることになる廷臣たちは、何故に軍事的武装化をしなかったのか、そして武装化をしないにも拘わらず何故に、明治期まで生き延びることが出来たのかということが、大きな疑問としてわき起こってくることとなる。

東アジアの文脈の中で考えてみたとき、日本の公家に相当する社会階層は中国の魏晋南北朝から隋・唐時代にかけて大きな勢力をもった権門貴族層、同じく朝鮮高麗朝の世襲的貴族層であると見て大過ないだろう。

その限りにおいてこの三国は類似した社会構成をとっていたことになる。さらにこの三国では武人勢力の台頭という点においても軌を一にしているのである。日本で平氏政権や鎌倉幕府が成立していた頃、高麗国では武人の崔忠献が軍事力をもって王朝の実権を掌握し、それより約百年にわたって武人政権が続くこととなる。中国は

公家と武家
その比較文明史的考察
村井康彦編
▶A5判・444頁／定価8,190円　ISBN4-7842-0891-7

公家と武家Ⅲ
王権と儀礼の比較文明史的考察
笠谷和比古編
▶A5判・350頁／定価8,190円　ISBN4-7842-1322-8

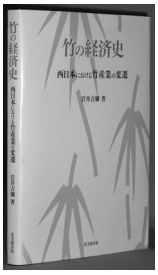
公家と武家Ⅱ
「家」の比較文明史的考察
笠谷和比古編
▶A5判・各530頁／定価9,870円　ISBN4-7842-1019-9

国際シンポジウム 公家と武家の比較文明史
笠谷和比古編
▶A5判・490頁／定価8,400円　ISBN4-7842-1256-6

竹の経済史 ――西日本における竹産業の変遷――

岩井吉彌著

【最新刊】



古くから生活に欠かせない素材であった竹。現在、竹需要は減少傾向にあるが、竹産業に関わる多くの人々が活発な活動を続け、また一方では竹林が全国規模で荒廃している。

竹産業は、戦後何回かの大きな転換期に、商品構成を変化させながら存続してきた。西日本を中心に、83名の業者と７箇所の公的機関への聞き取り調査を行い、竹産業について歴史的な視点から総合的かつ実証的に分析する。

《目　次》

第１章　竹および竹産業の基礎知識
第２章　大分県竹産業の変遷
第３章　鹿児島県竹産業の変遷
第４章　熊本県竹産業の変遷
第５章　京都府亀岡市の竹産業の変遷
第６章　京都市を中心とした竹産業の変遷
第７章　わが国への竹材及び竹製品の輸入

いわい・よしや…京都大学大学院農学研究科　森林・人間関係学分野教授.

▶A5判・204頁／定価4,725円　ISBN978-4-7842-1391-7

近世吉野林業史

谷彌兵衛著

吉野の地に生まれ、林業とそれに携わる人々の浮沈を間近に見て育った著者が、吉野林業の光と影を、史料に基づき実証的に明らかにする。幾多の困難に直面しながらも、決して屈することのなかった吉野林業のDNAを今に伝える意欲作。

▶A5判・538頁／定価9,765円　ISBN978-4-7842-1384-9

近世後期瀬戸内塩業史の研究

山下恭著

塩業と醤油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を細かく分析し、さらに塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究の一書。

【内容】 近世瀬戸内塩業史研究における問題の所在／近世後期の塩業と醤油業／近世後期の塩業の燃料問題と塩業労働　ほか

▶A5判・300頁／定価6,300円　ISBN4-7842-1287-6

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

18世紀末以降、河内国丹南郡岡村（現藤井寺市）の庄屋を世襲した豪農・地方名望家・岡田家に遺された「岡田家文書」を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造の観点から解明する。

▶A5判・508頁／定価8,190円　ISBN978-4-7842-1385-6

京・近江・丹後大工の仕事

近世から近代へ

建部恭宣著

江戸時代から明治・大正にかけての京・近江・丹後における大工について、就労状況、町大工の構成と作事棟梁制度の変遷など、史料の精査に基づいてその大工活動の実態と近代化への歩みを考察する。

▶A5判・270頁／定価5,775円　ISBN4-7842-1282-5

近世御用絵師の史的研究

幕藩制社会における絵師の身分と序列

武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編

「御用絵師」を、禁裏御用、幕府御用、諸藩御用などの公的事業に携わるすべての絵師と規定し、全国的官位官職制度の中での組み込まれかた、為政者の組織編成、掌握方法、自身の身の処し方を解明する。

▶A5判・458頁／定価7,875円　ISBN978-4-7842-1392-4

十九世紀日本の園芸文化

江戸と東京、植木屋の周辺

平野恵著

本草学・見世物研究分野を視野に入れ、また大田南畝らが主導した化政期以降の狂歌界との関連を指摘するなど文芸分野との統合をはかり、「園芸文化」という新しい領域を開拓する意欲作。図版70余点。

▶A5判・544頁／定価6,825円　ISBN4-7842-1292-2

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

明治維新以降の日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を344の小項目としてとりあげる。大項目には３ないし４頁の総説をおき、日本産業技術の流れを把握することができる。

▶B5判・550頁／定価12,600円　ISBN978-4-7842-1345-0

鉄道日本文化史考

宇田正著

「文化の鏡」としての鉄道をとりあげ、知識人の体験や一般人の認識から民俗・観光（巡礼）・教育との関わりを通して、鉄道が日本人の内面的形成に果たした文化的役割を明らかにする。

▶A5判・352頁／定価5,775円　ISBN978-4-7842-1336-8

書評・紹介一覧　3～5月掲載分

※(評)…書評（紹)…紹介（記)…記事〔敬称略〕

木村蒹葭堂
(紹)NHK教育テレビ 5/22

日本古代地域史研究序説
(評)『日本歴史』719号(小林昌二)

中世日本の政治と文化
(評)『古文書研究』65号(細川武稔)

近世社会と百姓成立
(評)『日本史研究』549号(原田誠司)

長崎奉行の研究
(評)『日本歴史』720号(安高啓明)
(評)『歴史学研究』840号(戸森麻衣子)

近代茶道の歴史社会学
(紹)『炎芸術』94号
(評)茶道文化 5/1(中村修也)
(評)儀礼文化ニュース 5/20(石田武久)

関西モダニズム再考
(評)朝日新聞 3/23(橋爪紳也)
(紹)週刊『エコノミスト』3/25
(紹)産経新聞 4/10
(紹)毎日新聞夕刊 4/25

酔うて候 河鍋暁斎と幕末明治の書画会
(評)朝日新聞 3/9(北澤憲昭)
(記)『書道界』20巻3号

近世吉野林業史
(紹)奈良新聞 3/2
(紹)日刊木材新聞 3/8
(紹)朝日新聞奈良版 3/15
(評)奈良民報 4/6(芝房治)
(評)農林経済(時事通信社) 4/14(田中淳夫)

祭りのしつらい
(紹)産経新聞 4/6

東寺宝物の成立過程の研究
(紹)中外日報 4/24

王権と都市
(記)産経新聞夕刊 3/3

みやこの近代
(紹)日本経済新聞夕刊 4/15
(評)京都民報 5/4(岩井忠熊)
(紹)京都新聞 5/11

明治維新史という冒険
(紹)山口新聞 4/6
(評)読売新聞 5/4(御厨貴)

3月から5月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
佛教大学鷹陵文化叢書	18	18	明治維新史という冒険	1394-8 C1021	08017166	0960588	08683617	2,520	3
公家と武家Ⅳ	4	4		1389-4 C3021	08023021	0962458	08936452	8,925	4
佛教大学鷹陵文化叢書	別巻	別巻	善導大師と法然上人	1401-3 C1014	08022992	0962475	08936304	2,520	4
佛教大学研究叢書	2	2	平安期の願文と仏教的世界観	1393-1 C3015	08022977	0962445	08936312	6,825	4
大手前大学比較文化研究叢書	5	5	阪神文化論	1398-6 C3090	08026267		08979296	3,360	4
花園院宸記	17	24・26		1407-5 C3321				399,000	5
シリーズ古典再生	1	1	一千年目の源氏物語	1408-2 C1091	08029660		09044322	1,680	5
別府大学文化財研究所企画シリーズ	1	1	経筒が語る中世の世界	1409-9 C3021			09044330	5,040	5

3月から5月にかけて刊行した図書

図書名	著者名	ISBN978-4-7842	TRC	NPL	OPL	定価	発行月
畿内の豪農経営と地域社会	渡辺尚志編	1385-6 C3021	08014845	0959545	08777435	8,190	3
近世御用絵師の史的研究	武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編	1392-4 C3070	08014844	0959374	08816910	7,875	3
王権と都市	今谷明編	1396-2 C3020	08017149	0960149	08816928	7,140	3
みやこの近代	丸山宏・伊從勉・高木博志編	1378-8 C1021	08017184	0960592	08840803	2,730	3
石山寺の信仰と歴史	綾村宏編	1387-0 C1021	08021060	0962485	08876716	1,890	4
古代日本の伝承と歴史	渡里恒信	1403-7 C3021	08024169	0963716	08936486	6,300	4
増補 郷土教育運動の研究	伊藤純郎	1402-0 C3021	08028398		09036260	10,290	5

（表示価格は税5%込）

▶てぃーたいむ余録◀

この時期、朝早く起きると、東山のあたりがまさに「紫だちたる雲の細くたなびきたる」というふうになっていて、思わずこの美しいリズムの一節を口ずさんでしまいます。ただ、小社刊行『みやこの近代』（本誌8頁参照）の小椋純一先生の論考によれば、京都の山々の植生は近代にかなり変わっており、千年前と同じではないのですが……。

それでも、清少納言が残したこのリズム、紫式部が生みだした人間ドラマはまぎれもなく千年後の我々を感動させる、すばらしい歴史遺産です。　(h)

▶表紙図版◀

「絵入源氏物語」　（『一千年目の源氏物語』より）

▶営業部より◀

お客様から本の内容に関するお問い合わせを受ける事があります。ただし、詳細な内容となると、しどろもどろになりますが、一生懸命調べてお答え致します。おそらく個人的に趣味で勉強されているであろう方も多くいらっしゃいます。

本を読むということは「何かを知りたい」という欲求から生じます。「この論文を書くために、この本を読む」という研究者の態度はその点、本道にはずれているかもしれません。

少しでもお客様が求めている情報を小社の本が提供できるよう、これからもお客様が満足できる状態を生み出していきたいと考えています。　(I)

TIBF 2008 日本最大の「本」の展示会!

第15回 東京国際ブックフェア

Tokyo International Book Fair

同時開催

- 自然科学書フェア
- 人文・社会科学書フェア
- 児童書フェア
- 編集制作プロダクション フェア
- 学習書・教育ITソリューション フェア
- デジタル パブリッシング フェア

あらゆるジャンルの本が割引価格で購入できます。

※一部例外を除く

会　期: 2008年7月10日[木]～13日[日]
※12日[土]・13日[日]は一般公開日

時　間: 10:00～18:00

会　場: 東京ビッグサイト

入場料: ¥1,200(税込み)
(12日[土]・13日[日]に限り小学生以下は入場無料)

主　催: 東京国際ブックフェア実行委員会
リード エグジビション ジャパン株式会社

世界30カ国・770社の本が一堂に集結!

思文閣出版も出展します

人文書・芸術書の専門書を中心に、小社刊行の日本文化関連書籍を展示販売いたします。また、慣じみの薄い和書・古典籍類を多数展示し、実際に手に取って御覧頂けます。皆様のご来場をお待ちしております。

本展の招待券をもれなくプレゼント! (¥1,200相当)

プレゼントの応募は下記のいずれかの方法で

- ホームページからのお申込み
  www.bookfair.jp/ad/
- FAXまたはハガキでのお申込み
  ①住所　②氏名　③職業(勤務先)　④電話番号　⑤本誌名を明記のうえ、下記宛先までお送りください。
  ※ハガキでのお申込みは、6/27(金)消印有効とさせていただきます。

リード エグジビション ジャパン株式会社
「東京国際ブックフェア招待券プレゼント係」
〒163-0570　東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル18階
TEL: 03-3349-8507　FAX: 03-3349-8523

読書推進セミナー　受講無料

7月12日[土]13:00～14:30
人間の関係
作家
五木 寛之氏

7月13日[日]10:30～12:00
読書が子どもの成長の可能性を決める
立命館大学 大学教育開発・支援センター 教授
(立命館小学校副校長兼務) 陰山 英男氏

www.bookfair.jp/dokusho/ からお申込みください。(定員になり次第申込締切)

サイン会・トークショーなど、様々なイベントも実施!(詳しくはホームページで)

Reed Exhibitions

最新情報はホームページで
www.bookfair.jp
ブックフェア　検索

株式会社思文閣出版
〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7　☎075-751-1781(代)　FAX.075-752-0723
http://www.shibunkaku.co.jp/　e-mail: pub@shibunkaku.co.jp